

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供				
実践名	国語の授業における話し合い活動の授業展開の工夫	所 属	家庭総合科1年（担任）		
		職・氏名	教諭・吉田 健一		

1 実践の概要

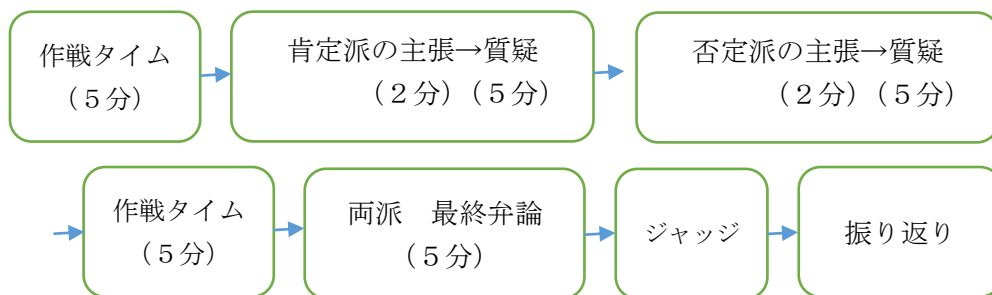
本学級は、自分の言葉で説明することを得意とする生徒は多くはない。学級内の帰りの会などを通じて「今日頑張ったこと」を発表する機会を多く設定し、前に出て感想を発表することは徐々に苦ではなくなってきた。自分で考えたことをまとめて話すということは、普段から意識したりそのような場を経験したりすることを繰り返して身に付くと考えた。今回、国語のディベートの単元において、生徒に自分の言葉で説明するということを身に付けられるよう授業を行った。

2 実践の内容

授業の中では、実践を多く取り入れたいと考え、計4回の内3回をディベートに取り組むことにした。はじめにディベートの内容やグループの役割分担、やり方などを説明し、ディベートの流れを確認する動画を見せることで、ディベートとはどのようなものなのか確認させた。以前、「秋と冬どちらが良いか」を題材に良い所を出し合う機会があり、そのときには自分自身の思いや気分で話せなくなってしまう生徒も多かった。その様子を振り返りながら動画を見せた。

実際のディベートでは、司会・時計・記録係、肯定派、否定派3つのグループに分かれ、1グループ2、3人の少人数のグループで行った。流れとしては、はじめに作戦タイムを取り、肯定派主張・質疑、否定派主張・質疑を行い、再度作戦タイムを取った。最後にそれぞれ最終弁論をし、司会・時計・記録係がジャッジを行った。ジャッジの前後には、やってみて自分や相手の良かったところと悪かったところなどを記入する振り返りの時間を必ず設けた。

はじめは流れややり方を教師に質問していたが、一度行って流れを理解すると、質問が減っていった。また、ディベートの回数をこなすごとに質問の回数が減り、司会を中心にみんなで進めることができてきた。話し合いの内容的には、一人が主張や意見を言い、もう一人はあまりしゃべらないことがあった。しかし、少人数で行ったこともあり、主張を言った人がしゃべらない人にも気を配り、発言しやすい様子を作るなどの場面も見られた。また、振り返りの時間を多めに取ることによって、自分や相手のグループの良かった所や良くなかった所をしっかりと考えて記入することができた。



(実際の流れ 生徒に配布したプリントの一部)

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

新しいことをやってみるということは、失敗して自信を無くさないように配慮が必要ではあるが、今回のディベートの授業を通して、どれだけ自分の考えや思いを話すことができるか、一度やってみて自分自身の実力を知ることの大切さを改めて知ることができた。また、主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、教師や仲間からの助言や自分自身の振り返りを受けて、どのようなところが良かったのか、改善していくことは何なのかを全員で共有し、次につなげることが大切であると言える。今後は、改めて考える場を今回に限らず、様々な場面で設定し、振り返りの仕方を工夫しながら指導に努めていく。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供			
実践名	新型コロナウイルス感染症の感染禍における対策～全校での音楽発表の実施について～	所 属	農業科2年（副担任）	
		職・氏名	教諭・石田 浩子	

1 実践の概要

音楽科ではこれまで、グループ学習を主として歌唱や器楽、身体表現の学習を行ってきた。しかし、本年は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、飛沫や密集による感染防止のため、学習内容やその取り組み方に変更が生じることとなった。特に、学校祭に向けた全校合唱やダンスといった学習活動はこれまで、学年の枠を越えてグループが編成できることから、重要なグループ学習の一つであったが、生徒同士の関わりに密集が生じることから、全校生徒による合唱や斉唱、ダンスといった活動を中止せざるを得ない状況となった。そこで、本年の学校祭では各学年ミュージックビデオの制作へと方向を転換し、制作した映像を鑑賞することで学年を越えた交流を図ることとした。ミュージックビデオの制作にあたって、各学年でテーマを取り入れた。

- ・1学年「ダンス」～身体表現やグループワークの基礎、基本を学ぶ
- ・2学年「パロディ」～歌詞や曲調から雰囲気を感じ取り、表現に工夫を加える
- ・3学年「ストーリー」～歌詞の内容から独自のストーリーを創造し、表現する

学年が上がるごとに、より高度な表現が求められるテーマを取り入れることで、鑑賞した際にその変化が分かりやすいようにテーマを設定した。上級生と下級生の直接的な関わり合いがなくても、表現することへの学びが上級生から下級生へと、連鎖されることをねらいとして取り入れた。

2 実践の内容

(1) 各学年のグループ学習の方法について

各学年のグループの人数編成の仕方について、表1のように整理した。

	A グループ	B グループ	C グループ	計
1 学年	9 名（4+5）	9 名（4+5）	9 名（4+5）	27 名
2 学年	8 名	8 名	7 名	23 名
3 学年	12 名	11 名		23 名

表1 各学年のグループ人数編成

グループ編成でも、学年で段階を設けた。意見の数が少ない程、話をまとめることが容易であると仮定し、グループの人数が増える程、高度なグループワークになることを想定して表のように編成した。1学年はこれまでにグループワークの経験が少ないため、容易に意見をまとめることができるように、9名の大グループをさらに4名と5名のグループで分け、小グループから活動を開始した。活動が定着した後、大グループと小グループの両方で活動を行った。2学年は1年次での基礎を生かし、3つのグループで編成した。3学年は最上級生であることから、グループの人数を増やし、2つのグループで編成した。

(2) 制作について

各学年、ミュージックビデオの中に創作ダンスを取り入れることを決まりとしている。ダンスの作り方であるが、1人が1小節ないし2小節分（4カウント～8カウント）のダンスを考え、そのダンスをグループで披露し合い、披露したダンスをつなぎ合わせて8小節ないし16小節のダンスを作り上げる、という表2の方法でダンスを制作している。

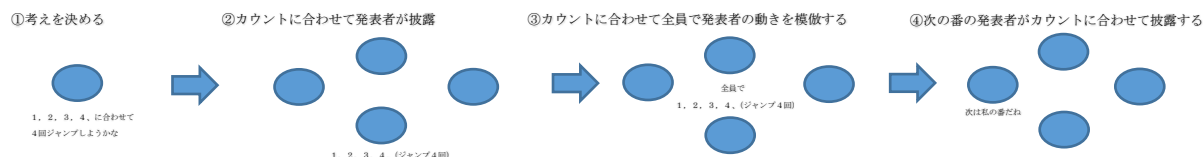


表2 ダンスの作り方について

動きについては、歌詞に合わせたジェスチャーや、思いつかない場合には、手拍子やエアロビクスの動き（歩く、ジャンプ）など、どんな動きでも良いことを伝え、必ず4カウント～8カウントのリズムに合わせて動きを決めるように生徒たちに伝えた。動きを決めることが難しい生徒については、STが言葉掛けをし、大多数の生徒は「エアロビクスの動きを参考にしてごらん」と言葉掛けすると、決めることができた。

この他、2学年や3学年については創作ダンスの他に、歌詞の内容から物語を創造し、曲想に合わせた表現も取り入れることを決まりとした。2学年は、教師が撮影シーンを設定した状況の中で、どのようなパロディ表現をしたいかグループの中で意見を出し合い、その内容を決めさせた。3学年は、1番の歌詞と2番の歌詞で担当を分け、歌詞の内容から一連の物語を創造し、表現した。（表3、表4参照）

撮影シーン	作業学習の中でのパロディ内容（出た意見一部）
窯業科	窯業科の道具をドラムセットやギターに見立てて、演奏しているシーン。
農業科	リヤカーに乗ってみる、水やりに使ってるシャワーを使ってみたい。
家庭総合科	ミキサーの中に紙吹雪を入れて、ミキサーの中身をこぼしてしまう。

表3 2学年パロディシーン内容

撮影シーン	歌詞から連想した物語の内容（出た意見一部）
1番	それぞれの学科の作業の様子、失敗しているシーン、歌詞に合わせて倒れる、夢の中でヒーローが登場する。
2番	学校で教室のシーン、一人だけ話題についていけない生徒がいる、みんなが追いかけてグラウンドか体育館に行く、ヒーローが登場する。

表4 3学年物語内容

完成した映像は学校祭の学年発表時に上映されたが、制作途中のものも参考として、学習中に鑑賞した。1学年は2学年のダンス映像の一部を参考として始めに鑑賞し、その取り組み方について学んだ。3学年は1学年や2学年のダンス映像の一部を鑑賞し、後輩達の取り組みやダンスのレベルの高さ、話し合いの様子の映像に刺激を受け、より高い表現を目指したいと、意気込みを新たに取り組むことができた。撮影にかかった期間は1学年、2学年が約1ヶ月半、3学年が現場実習を挟んで約3ヶ月と長めであったが、途中で各学年の進行具合や映像を見せることで刺激を受け、どの学年も意欲高く取り組み続けることができた。

(3) 話し合い活動における学年での変化

今回の実践を各学年で比較した際、上級生になるにつれて話し合いの様子に変化が見られることが分かった。グループワークの経験が少ない1学年では、出た意見をまとめるにとどまる様子が多かったが、2学年になると出た意見をまとめた上で、さらに良い方法や案を探る生徒が多く見られた。また、制作したダンスが難しいときに、1学年は繰り返し練習することで乗り越えようとする様子が見られたが、2学年になると、「一部内容を変えてみよう。」と生徒たちから案が出てくるようになった。3学年は自分の意見を出した上で、周りの意見に同調して意見をまとめていく様子が見られ、意見がまとまらないときにはグループを分けて表現するなどの工夫も見られた。そして、ダンスの内容であるが、2学年になると動きがより歌詞に合わせた表現に特化する様子が見られ、3学年では歌詞に合わせた表現の他に、曲調に合わせて動きの大きさを調節する様子が見られた。

学年が上がるにつれて、仲間の様子を見て、意見に同調したり、内容を変更したり、話し合った内容をまとめたりすることが上手になっていること、また音楽的な特徴を制作に取り入れようとする様子が増えていることが分かった。なお、この変化は他学年の生徒も完成した動画の鑑賞を通して実感しており、学校祭単元のまとめの授業で行ったワークシートの記載からも、そのことが伺えた。(表5参照)

	1年生から	2年生から	3年生から
1年生へ		・1年生らしいダンス、表情をしていて、かわいらしさをのこしつつ真面目な表情などでできて良かった。 ・ダンスの動きが良く、初めてやることをやってみようという気持ちを感じた。 ・色々なグループのダンスの場面では、「やってみよう」ほい感じができて面白かった。	・本当に自分達で考えたのかと思うくらい良いダンスができていた。笑顔で明るくダンスを踊れていると思った。1年生らしい、カッコかわいいダンスだった。 ・時間が少ない中でここまでの完成度で初めてのミュージックビデオが作れているのはすごいことだと思った。初めてなのに堂々とダンスできて良かった。
2年生へ	・色々な所でおもしろい所があって最高だった。ダンスも良くできていた。 ・音楽に合った踊りを見ると口ずさみたくなる。楽しめた。		・とても面白おかしく作ったミュージックビデオだったと思う。ある意味1、3年生にはできない発表をしていると思った。(笑) 2年生の個性が活かされている発表だったと思う。
3年生へ	・歌詞と3年生の動きが合っていてよかった。振り付けが曲と合っていた。 ・1、2年生にはできない動きがたくさんあってすばらしいと思った。撮る期間が長くて大変そうだったけど、考えた甲斐があったのではないかと感じた。	・3年生にしかできない音楽発表だと思った。とても上手だった。感動して泣きそうになった。 ・「明日も」の歌詞と演技がぴったり合っていて途中から感動してさすが3年生だなと思った。	

表5 各学年の動画を見た感想より（一部抜粋）

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回、全学年で合唱やダンスなどの活動を共にすることは難しかったが、学習の中で各学年の様子を伝えたり、実際に制作途中の映像を見せたりすることで、他学年同士が意識し合い、取り組みの姿勢にも変化を感じることができた。感想の中にも、下級生が上級生の映像に尊敬の言葉を述べたり、上級生が他学年の良さを理解して評価したりといったものが多く、ミュージックビデオ制作を通して、他学年の良さを実感し、学びの連鎖につなげることができたと感じている。この結果からも、上級生は映像を通して下級生へ表現することの姿勢を示すことが十分にできたのではないかと考えている。(表5参照)

コロナ禍では、全校生徒で活動することも簡単ではないが、活動内容の映像を見せたり、伝えたりするだけでも、上級生が下級生に与える影響が多くあること、また、上級生も同様に下級生の取り組みから自分たちの活動を振り返って刺激を受けることが分かった。今後も、全校での活動のみならず、学習活動の中で上級生や下級生の活動を紹介することで、学びの意欲向上につなげていきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	菊栽培を通して園芸の興味関心を高める	所 属	農業科2年（学科付）
		職・氏名	教諭・大槻 啓二

1 実践の概要

農業科の作業の目的は、農業という産業を通して仕事をする姿勢や態度を培っていくことと自分では理解している。学科内の押さえとして学年進行に合わせて、農業の技術面の割合を多くしていき、学年を追うごとに高い知識・技術を習得していくものとしている。

農業科では、1年では玉ネギ、ミニトマト、スイートコーン、2年では、豆類、ジャガイモ、草花、3年ではシクラメン、カボチャ、ニンジンなどを教材として農業技術を学び農作業を行っている。本校では学年8～9名による集団による栽培であり、生徒個々の取り組みは基本行っていない。そこで、個々に栽培を取り組ませることによって、栽培の基本を学習し、農業（植物）に対する興味・関心を喚起させることをねらいとしてこの取り組みを行った。

2 実践の内容

(1) 教材の選定

取り扱う教材として、「菊」を選定した。その理由として、次の3点とした。

- ア 移植から開花まで複雑ではないにしろ、かなりの手入れを要する。
- イ 春に作業を始めて、11月頃に花が展開する。場合によっては、学校祭で展示することも可能であり、成果が目に見える。
- ウ 本校で栽培したことのない草花である。

菊は、一般的に種子から栽培ではなく、苗（冬至芽）を春先に植え、本校で栽培している大多数の草花とは栽培の形態が異なる。また、花が終了したあとも、そのまま越冬させて、永続的に栽培でき、栽培を次の学年に引き継ぐこともできる面もある。今年度は、栽培の基礎を知るという点に力点をおき、まずはやってみて、次年度には栽培の成果を学校内に展示できるようになるという願いをもって取り組んだ。

(2) 栽培の実践

ア 6月11日の作業

菊栽培の趣旨を説明しながら、少し大きくなった冬至芽を株元から切断し、挿し木を9cmポットに行う。切断面から発根してくること、挿し木による増殖方法について説明する。



イ 6月26日の作業

挿し木苗から発根したことを確認し、更に大きなポットに移し替える作業を行う。このときは、菊栽培に使用する用土作りも行わせる。通気性、排水性の良い土が必要となるために専用の土作りを行う。このときに摘心も行い、わき芽の伸張を促していく。



ウ 7月31日の作業

更に成長した菊を鉢に移し替える。この鉢で最後まで栽培する。また、余分なわき芽を除去し、3本仕立てにする。



エ 9月9日の作業

更に伸張した茎に支柱を添えて、草姿を整える。



オ 10月21日の作業

つぼみが茎の先端部や節からいくつも生じてくる。高さができるだけ合うように摘蕾を行う。このときは、花を支える輪台の準備が間に合わず、うなだれてしまった花が多かった。



3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回の実践では、通常の作業を行いながらの作業となった。実際のところ作業担自身も栽培歴が浅く、心もとない中での作業となってしまった。花は咲いたものの花の高さを合わせることができなかったり、花がうなだれてしまったりするなど準備不足や要所要所の詰めが甘さが出てしまった。通常作業に追われてしまい、作業適期を見逃すなど思うような作業ができないことが多かった。また、菊の栽培のみに特化した作業日誌を活用して体系的に取り組めるようにすれば良かったなど反省ばかりが先になってしまうような内容だった。とはいえ、今年度の栽培については次年度の準備という位置付けにしており、最終学年で本当の開花ができるように指導していきたいと考えている。

令和２年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	国語の授業における言語活動の充実のための工夫	所 属	窯業科２年（副担任）
		職・氏名	教諭・高瀬 友里

１ 実践の概要

２学年では、国語の授業は各学級で行っている。窯業科の８名の生徒においては、実態は様々であるものの文章を書くことや話すことなど国語の授業に苦手意識を持っている生徒も少なくない。また、「事実などを正確に理解すること」「自分の考えをもつこと」「相手に的確に分かりやすく伝えること」「言葉で表現すること」などの言語活動において課題を抱えている生徒が多いと感じている。そして、このような言語活動の能力は国語に限らず、他の授業や普段の学校生活での人とのコミュニケーションなどにも深く関わることである。

そこで、国語の授業で言語活動を充実させることで課題の克服につながっていくのではないかと考えた。

２ 実践の内容

１学期は「聞くこと・話すこと」、２学期は「書くこと」に重点をおいて授業を行った。

(1) 「聞くこと・話すこと」について

まず、聞くときのポイントとして、次の３点を提示した。

- ・相手と正対すること
- ・うなずく、相づちすること
- ・話を最後まで聞くこと

次に、話すときのポイントとして、次の３点を提示した。

- ・相手を見て話すこと
- ・丁寧な言葉遣いを意識すること
- ・聞き取りやすい声の大きさと話すこと

これらのポイントは、継続的に確認することで少しずつ改善が見られた。しかし、授業以外の場面では意識できていない生徒も多いため、授業以外の場面でも継続的に指導していく必要があると考える。

次に、実際の取り組みとしては、SST の要素を取り入れた活動を中心に行った。また、生徒同士でインタビューする活動も行った。それらの活動を通して、「自分の考えをもつ」「相手の考えを受け止める」「相手が分かりやすい伝え方」などを意識させるようにした。なかなか自分の考えをもてなかったり、みんなの前で話すことに抵抗があったりする様子も見られたが、数を重ねるごとに成長が見られた。

(2) 「書くこと」について

まず、主語、述語、目的語、助詞について学習した。「誰が」「何を」「どうした」などを明確にすることで分かりやすい文章を書くことにつながった。また、分かりやすい文章を書く方法としてPREP法を取り入れて文章を書く練習を行った。「結論」「理由」「具体例」「結論」という順番にのっとりて文章を考えたため、普段は何を伝えたいのか分かりづらくなってしまう生徒も簡潔な分かりやすい文章を書くことにつながった。

次に、学校祭の作文では原稿用紙に書き始める前に、ワークシートに書きたいことを整理するよ

うにした。項目ごとに自分が伝えたいことを明確にしておくことで、原稿用紙に書く際に以前よりもスムーズに書き進めることができた。また、文章の構成も順序立てて書くことができたため、何を伝えたいのか分かりやすい作文となった。

最後に、夏休み前に第1回の漢字コンテストを行った。全員同じ問題に取り組むのではなく、挑戦する級を自分で決め、その級の漢字一覧の中から好きな熟語を選び問題を作るようにした。漢字を苦手としている生徒もいるが、自分で問題を作ることで意欲的に活動することができた。冬休み明けには、第2回を行う予定である。今回の問題作りでも意欲的に活動することができている。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回の実践では、「聞くこと・話すこと」「書くこと」に重点を置いて取り組んだ。様々な言語活動を行う中で、相手が分かりやすい表現を考えたり、それぞれの考えがあることを知ったりすることは、「主体的・対話的で深い学び」にもつながる部分があったのではないかと感じる。

実践によって一定の成果が見られたが、定着させていくためには継続した指導や国語以外の授業などにおける指導も必要になってくると考える。今後も、それぞれの生徒の実態に合わせ、一人一人が主体的に取り組める授業を行うことができるよう努力していきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート（案）

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供			
実践名	言語環境の整備と言語活動の充実について	所 属	窯業科2年（学科付）	
		職・氏名	教諭・中市 浩史	

1 実践の概要

特別支援学校学習指導要領解説総則等編第8節教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項に「生徒の言語活動の充実」（p119）についての記述がある。そこには、「知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習基盤となるのは、言語に関する能力である。さらに、言語は論理的思考だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが求められている。したがって、今回の改訂においては、言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実することとしている。」と記述されており、言語活動の充実が生徒の思考力、判断力、表現力等を育む上で重要なことが分かる。また、「マスコミや情報通信ネットワークなどの情報手段の発達、映像、出版物の氾濫などにより、生徒を取り巻く環境は著しく変化している。それらは、生徒の言語活動にも影響を及ぼしており、それだけに学校教育において国語を正しく理解し用いる能力や態度の育成について配慮していくことがますます重要になってくる。」とも書かれており、言語整備が必要であることが分かる。

本校の生徒については、教師や先輩に対して粗雑な言葉で話をしたり、語彙が少なく、自分の気持ちを言語化したりすることが困難な生徒が多数いるように感じている。また、目上の方に対する丁寧な言葉遣いにおいては、中学校や高等学校では先輩との関りの中で段階的に学んでいくことが多いが、知的障害がある生徒は、同年齢の生徒と比較して、概念的スキルや社会的スキル、実用的スキルに有意な遅れが見られることから、先輩が後輩に正しい言葉遣いを教えるという関係性が構築されにくい状況があると考えている。また、前述した語彙の少なさや言語化に課題があることから、生徒同士での会話に生活年齢との差が生じる場合が多く、生徒同士での関りで言語能力を向上させることには課題が多くあるのではないかと考えている。だからこそ、学校や教師が言語環境を整備することが重要だと考えている。

そこで、総則等編に記載されている「学校生活全体における言語環境の整備例」を実践することで、本校の言語環境の整備を図り、生徒一人一人の言語能力を向上させようと考えた。

2 実践の内容

(1) 正しい言葉で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと。

（※今回は、「正しい言葉で話し」に着目して実践した）

「正しい言葉」に関しては、授業だけでなく、学校生活全般において生徒に対し、「丁寧語」を用いて話をするを徹底して意識した。そうすることで、普段粗雑な言葉を多く使っている生徒も丁寧な言葉で返してくることが多いことに気が付いた。これは、アルバート・バンデュラの「モデリング」の効果だと実感することができた。実践の概要でも述べたが、生徒を取り巻く環境が、生徒の言語活動に影響を及ぼしている現実がある。だからこそ、今回の実践で、言語環境の整備こそが、生徒一人一人の言語能力につながることを感じる事ができた。

今後もモデリングの効果を活用し、生徒が丁寧な言葉で他者と話せるよう、自らが模範となって丁寧な言葉遣いをし、生徒の語彙力向上や、自分の気持ちを言語化できるように育てていきたい。

(2) 教師と生徒、生徒相互の話し言葉が適切に使用されるよう配慮すること。

(※今回は、「教師と生徒」に着目して実践した)

総則等には、言語活動の充実に向けて「国語科において」との記載が多く、新学習指導要領総則等には「国語科を中心に」という記載がある。高等部学習指導要領国語の内容には「自分の立場や意図をはっきりさせながら、相手や目的、場に応じて適切に話す」と記載されている。また、キャリア教育の「人間関係形成・社会形成能力」では、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができる」とともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。」とも記載されている。このことから、「教師と生徒相互の適切な話し言葉」とは

- ・教師は目上の立場の人間であることから、生徒は丁寧な話し言葉で会話を行う。
- ・教師は生徒の言語能力が高まるよう、場に合った正しい言葉で話をする。

の2点を定義し、生徒との対話を実践してきた。

実践の中では、生徒自身が友達と話をする延長で粗雑な言葉を使って校内で話をしてくることがあったが、「先生は友達ではないですよ。」と明確に伝えることで、立場を理解し、丁寧な言葉に言い直すことがおこなわれていた。学校の風土や集団生活を送る上での秩序というものを考えれば、そういった教師の毅然とした対応こそが、言語環境の整備にもつながることを実感することができた。また「(1) 正しい言葉で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと」でも述べたが、生徒の模範となるような正しい言葉遣いを意識して生徒と関わってきた。しかし、学習指導要領や生徒指導提要で言われている「人間的な触れ合い」という点においては、場面は限られるが、いわゆる「くだけた」話し方を必要に応じて教師がすることによって、教師との心理的な距離が近づいたり、「場面に応じた切り替え」を学習したりすることができる。以上のことから、丁寧な言葉での会話を基盤としながらも、時に「くだけた」話し方をすることも、「適切な話し言葉」であると実践の中で感じることができ、私たち教員としての判断が重要となるのではないかと考えている。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回の実践を通し、改めて言語環境の整備と言語活動の充実が、生徒一人一人のキャリア発達のため、また社会への移行期である後期中等教育の場として重要であると感じた。また、学習指導要領解説自立活動編「6 コミュニケーション」においても、言語の形成や活用、表出などの必要性が記載されており、特に知的障害がある生徒にとっては重要度が高い。

生徒一人一人が卒業後に就労した際、職場ではほとんどの同僚が年上となり、丁寧な言葉遣いをすることが必須となる。そのような中で、平成30年に北海道教育委員会特別支援課が道内の特別支援学校卒業生の就労継続や離職に関する調査をした際、離職した方の半数は「職場で人間関係が築くことができなかった」との結果もある。

以上のことから、生徒指導主事及び生徒指導部長としての立場において、本校の生徒指導の中で「言語環境の整備と言語活動の充実」を重要課題とし、取り組んでいきたい。それは単に「目上の人には丁寧な言葉を使うのは当たり前である」ということではなく、「なぜ必要なのか」「その根拠は何なのか」「障害がある生徒のコミュニケーションはなぜ重要なのか」「生徒の言語能力がどのように生徒一人一人のキャリアを形成していくのか」ということを生徒指導にあたる全ての先生方や生徒と共有していきたいと考える。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	敬語の使い方の指導について	所 属	家庭総合科2年（学科付）
		職・氏名	教諭・成田 直浩

1 実践の概要

教師や寄宿舎指導員、上級生に対する言葉遣いがやや乱れている生徒が多い。生徒の将来の生活では、目上の人に対して正しい敬語を話せる方が人間関係を円滑に保つことができると考える。また、近年、卒業後に就職したとしても、3年以内に早期退職してしまう若者が多く、問題視されている。早期退職した理由として、同僚と円滑にコミュニケーションを図ることができずにトラブルを起こし、職場に居づらくなって退職する方たちが多く。このように学校での言葉遣いの乱れだけではなく、社会的問題にもなっていることからコミュニケーションの原点である言葉遣い、正しい敬語の指導が必要であると考えたため、本実践を選択した。

単元計画としては、第1回目に敬語の種類の理解（丁寧語、尊敬語、謙譲語）、第2回目に電話中に必要な敬語の理解とし、なるべく生徒が敬語に対して身構えることなく、興味・関心をもって学べるように計画した。

授業を進めるに当たり生徒の実態を考慮し、なじみのある「です。」「ます。」を多く使用する丁寧語を始めに学習させ、尊敬語、謙譲語と順を追って指導することで、より定着が図られると考えた。

2 実践の内容

第1回目の敬語の種類の理解では、ワークシートを活用しロールプレイを少し交えながら丁寧語、尊敬語、謙譲語を指導した。生徒にとっては昨年度も学習している既習事項ではあったが、謙譲語だけが思い出すことが難しかった。学校生活や寄宿舎生活、家庭生活において、丁寧語や尊敬語を話すことがあっても、謙譲語だけは使うことがないとのことであった。

第2回目の電話中に必要な敬語の理解では、「もし、自分に熱が出て、学校を休まなければならないときに、どのように電話をかけるか。」をテーマに授業を展開した。この授業では、実際に通話はせずにスマートフォンを手にしながら、学校の教師役、生徒役、ホームルーム担任役に分かれてロールプレイを行った。生徒にとっては、普段はメールでの連絡ばかりで電話使用に慣れていないこともあり、始めはたどたどしかった。「担任の～先生はいらっしゃいますか。」や「担任の～先生に代わっていただきたいのですが、お願いします。」など、言い換えが可能な部分の理解が難しかったが、事前に準備した手順書を参考にしながら仲間同士で話し合い、教え合いながら、回を重ねるごとにスムーズに話すことができるようになってきた。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回の単元は、生徒の将来の生活を見越し、現在使うことができている丁寧語だけではなく、尊敬語や謙譲語も理解することが必要であると考えたため、設定した。

第1回目の授業では、ワークシートに取り組む場面はあったが、座学中心の授業であったため、生徒にとってしっかりと理解することが難しかったと考える。しかし、授業の導入部分で敬語を理解する理由を伝えたことで、これからの授業に対する主体性は高まったのではないかと考えられる。第2回目では、前時の内容を基に、スマートフォンを用いたロールプレイ中心の授業を展開した。身体を動かしながら、そして話し合いを取り入れた活動であったため、生徒の表情も明るく和やかな雰囲気

の中で授業を進めることができた。この授業では、対話的な学びの要素が多くあり、電話先の相手にどのように伝えたら良いのかを仲間と積極的に話し合い、意見交換することができていた。

今回の単元は短期間ではあったが、生徒は敬語の必要性について気付くことができたと考える。これからの生活においても敬語は必要であるため、国語科の授業だけではなく、学校生活全般においても言葉遣いの指導を意識して継続していかなければならないと考える。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	生活の中で活用できる数学の工夫	所 属	家庭総合科2年（副担任）
		職・氏名	教諭・村田 悟美

1 実践の概要

2年生の数学の目標である「社会生活に必要な数学的知識を身に付けるとともに、生活の中で活用する力を育てる。」を達成するために、基礎的な計算処理能力の向上と、生活の中で活用できる題材の選択を考えて授業を進めた。生活の中で活用できる題材として次の3点を展開し生徒の深い学びが進むように実践した。

2 実践の内容

(1) 新聞記事を活用する

グラフや割合の学習では、新聞に載っている記事を活用した。割合（％）の学習では、天気予報の降水確率や住みやすさランキングを取り上げた。天気予報は降る、降らないの対象が2つなので割合の意味も理解しやすく、導入としては適切だった。住みやすさランキングでは、対象が都道府県と多くあり、理解が難しい生徒もいた。北海道が上位にあったので、関心を持ちやすい題材だった。

グラフについてはコロナ罹患者の推移を使った。緊急事態宣言の前と後での対比ができて、グラフが表す数値の意味が理解しやすかった。

(2) 作業学習で活用する

長さの学習で定規の使い方を数学で行い、その後作業学習で布に四角形の印を付けさせた。縦17cm×横23cmの四角を書く作業を行った。また縫い代1cm、ステッチ0.2cmの印付けを行った。作業学習での計測は、数学で使う定規と作業で使う物差しの違いに戸惑う生徒もいた。家庭総合科では方眼物差しを使っている。

(3) 身近な数値で理解を深める

速さの学習では、自分の出身地から今金高等養護学校までの距離を基に、車（時速60km）で何時間かかるか、1時間で着くには時速何kmで移動しなければいけないかなどの計算をした。また、徒歩（時速4km）ではどうなるか、時速230kmの新幹線ならどうなるかなども考えさせた。身近な数値を使った学習では、距離や時間、速さの関係がより分かりやすくなったと感じた。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

社会生活に役立つ数学的な力を養うための題材を取り上げて実践した。その時間には深い学びが確立できたかと思うこともあったが、継続的に知識の定着には至らず、今後も繰り返しの学習と適切な題材選びが必要と感じた。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	委員会活動における共同・協力的活動について	所 属	窯業科3年（学科付）
		職・氏名	実習助手・青山 未帆

1 実践の概要

これまで、図書委員会の活動では活動時間や内容の都合により指導者が主導して行ってきた。しかしながら、本来委員会活動は生徒による自治活動であると考え。そこで、活動内容の中で比較的自由度の高い「冬の飾りつけ作成」活動において、生徒同士の話し合いや協力が必要となる場面設定を行うことで、生徒同士が協力して活動できる場となるのではないかと考え、実践することとした。

- ・期間は10月～11月の委員会活動をグループ決め及び生徒話し合いや作成にあて、11月24日（火）の委員会で飾りつけを行う。
- ・使用道具（折り紙、ハサミ、カッター、カッター板、マスキングテープ、ラミネーター）を用意。
- ・実践前に図書委員会担当で打ち合わせを行う。

以上3点を当初の予定とし、実践を行った。

2 実践の内容

(1) 難易度ごとのグループ分け

生徒たちができるだけ学年混合となるようにグループ分けを行った。また、使用する道具や作成内容の難易度別に3つのグループを用意した。難易度の基準としては、「ハサミの使用が得意か」「カッターを使用した経験があるか（得意か）」等である。これらを生徒それぞれに確認した後、グループごとの作成内容を提示し決定した。なお、前年度の活動内容から表1のように作成内容を指導者側で決定している。

グループ (各3～4名)	作成内容	難易度
Aグループ	画像やイラストの検索・プリント・切り抜き・ラミネート	易しい ↓ 難しい
Bグループ	折り紙	
Cグループ	切り紙（ハサミ・カッター使用）	

表1 グループそれぞれの作成内容

(2) 生徒同士の話し合いや活動の様子

生徒たちは、参考となる書籍や前年度の生徒が作った飾り、指導者が作った作成例（写真1）を見て作成物を決定することができた。

普段話さない先輩・後輩のグループがあり、どのように話せばよいかわからない様子が見られたり、同学年のみで集まったりしている際には、指導者が考え方や発言について言葉掛けを行った。また、他学年が輪に入って活動できるよう促した（写真2）。逆に、慣れている生徒同士の場合、話し方がくだけていることが多かったため、適宜言葉掛けを行った。



写真1 作成例

飾りつけを行う際には、それまでに作った飾りの他、マスキングテープを貼ることによる飾りつけを追加するよう促した。また、生徒同士で「どこに飾り付けるか」「どのように飾り付けるか」を話し合って決めるよう言葉掛けを行うことで、生徒たちは協力して飾りつけを行うことができた（写真3・4・5）。



写真2 普段会話し慣れていない先輩後輩間の話し合い



写真3
どこに飾り付けるかの話し合い



写真4 飾りつけ風景



写真5 作成物やマスキングテープによる飾りつけ

(3) 成果や反省点について

ア 生徒同士の話し合いや活動の様子について

先輩に対して話しかけた話し方をする生徒や、活動中に「面倒くさい」「飽きた」といったマイナスの発言が見られる生徒に対して、どのような言葉掛けや対応をすべきか悩むことがあった。（今回の実践では、言葉掛けを行ったり、応援したり、作成を手伝ったりする等して対応した。）

イ 生徒の振り分けについて

グループ分けの際、学年ごとにグループ分けを行ったことで、慣れている先輩、後輩同士で集まるということがなく、よい振り分けができた。

所属生徒12名の内、1～2名が欠席ほとんど状態であった他、学校祭や生徒会役員選挙等により各1名が抜け、実質的に9～10名での活動となった。これらの行事や不測の事態のため、活動する生徒が抜けることを考慮し、2グループ程度に分けた方が当初目的とした「生徒同士の話し合い・協力的活動」をより多く行えると考えられる。

ウ 日程の変更について

11月15日（日）～12月11日（金）の間、生徒用トイレ改修工事のため図書室が封鎖された。そのため当初予定していた「11月24日（火）の飾りつけ活動」ができなくなり、12月15日（火）に行ったが、3学年見学旅行と日程が重なったため、3年生3名、欠席者2名を除いた7名での飾りつけ活動となった。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

生徒の実態によるものや、生徒の欠席、生徒用トイレ改修工事による図書室封鎖等の様々な要因により、はじめに予定していた実践予定から大幅な変更を行うこととなった。しかしながら、グループによっては普段話さない先輩後輩同士で協力して活動するという経験ができ、生徒たちにとってもよい実践だったと言える。

今後同様の活動を継続する場合には、

- ・生徒の欠席や行事により生徒が抜けることを考慮してグループの数や活動内容を決定する。
- ・どのように言葉掛けをしたり対応したりすればよいかわからない生徒がいる場合には、HR担任及びスタッフと相談して方針を決める。
- ・担当者間で、各生徒への対応についてより細やかな点に至るまで打ち合わせを行う。

以上の3点を考慮して行っていきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供			
実践名	直接対話をせずに意見交流をする方法	所 属	窯業科3年（学科付）	
		職・氏名	教諭・野呂 篤志	

1 実践の概要

生活単元学習は、学級ではなく学年で行われている。社会で生活するために必要なことを学習する。教師と生徒個人のやりとりだけではなく、生徒同士の関わりを増やしている。自分の考えを周りの生徒や教職員に伝えること、他の人の考えを聞くこと。このような対話による意見交流により、考えの違い、様々な考えがあることを知り、自分の考えを深めることができるからである。

今年度は、新型コロナウイルスの感染病予防対策のため、ペアやグループで集まっても、お互いに向き合い、会話を通しての意見交流は難しい。このような状況でも、なんとか生徒の考えを深め、より意味のある学習にしていくため、会話をせずに意見交流ができる方法について検討した。石川の実践⁽¹⁾に、「手紙回し風回覧」がある。メッセージカードに授業の気づきや感想を書き、教室内で回覧する。読んだ生徒は、メッセージカードにサインや新たにメッセージを加えていく。これは、「文字言語による『対話』実践」と言える。このような石川の実践を参考にして、「回覧」を通して、意見交流を行うことにした。

2 実践の内容

(1) 実践の方法

学年生徒全員を学科が混ざるように12名程度の2つのグループに分け、サイン欄を設けたプリント（図1）を用いて、実施した。

3年生活単元学習「社会人としてのくらし方2」 学習プリント その5

令和2年 月 日 氏名

事例1

毎日、あいさつしてるのに。無視する先輩がいる。なんでよ。私、何かした？

あいさつくらい常識でしょ。なんでこんな人がいるのよ。

この職場、サイダー。

○なぜトラブルは起こるのかを考える。

事例2

毎日、がんばってるよ。でもさ、さほる先輩がいるよ。オレのほうが仕事できるじゃん。

あいつらと一緒に仕事。やってられないよ。この職場はもうイヤだね。もっといい職場があるはずだ！

○なぜトラブルになったのだろう。

○あなたならどう対応しますか？

(サイン)

○トラブルが起こる理由は何だろう？

サイン欄

図1 回覧学習プリント

ア プリント1枚につきにサインをする欄を3つ用意する。

サイン欄に数を限定することで、3度回覧すること、3人の生徒の意見を読むことなど、見通しをもちやすくなると考えた。

イ プリントの回覧方向を固定する。

「最初の回覧は左側にいる人に回す」「2回目の回覧は右側にいる人に回す」など、回覧する方向を固定し、全体に確認することで、迷わずに回覧できるようにした。

ウ 音楽に合わせてプリントを回覧する。

回覧時に音楽をかけた。音楽が止まったときに手元にあるプリントを読むことにした。音楽をかけることにより、どれくらいプリントを回覧し続ければわかるようにした。偶発的に、様々な生徒のプリントが手元に来るので、学科をまたいで様々な生徒の意見を見ることができるようではないかと期待した。

音楽の操作は教師が行い、どのくらいで音楽を止めるかはその場の生徒の様子で決めた。使用した曲は米津玄師など J-POP であり、教師の好みで決めた。

エ プリントを読んだら名前をサインする。

プリントに書かれた意見を読んだとき、自分の名前をサインすることにした。サインを通して、誰に読んでもらったのかがわかり、学年全体で意見交流をした結果が手元に残ると考えた。

(2) 実践の実際

プリントのサイン欄、回覧の方向、音楽の使用目的を1つ1つ説明して、取り組むべきことを確認した。

学習内容が2種類あったため、プリントも2枚となった。各プリントについて3回回覧したため、合計6回意見を読む機会を作った。

ア プリント1枚につきにサインをする欄を3つ用意する。

「回覧は3回です」と活動方法を具体的に説明することができた。生徒も見通しについて意見なく、取り組むことができた。

イ プリントの回覧方向を固定する。

例えば「左側の生徒に回していく」と指示を出す。すると、端に座っている生徒で、左側に生徒がいない場合がある。その場で、後ろの生徒に回覧すると決め、生徒全体に確認した。回覧をするときは、STが机間をまわり、回覧方向に困っている生徒を支援することで、大きく止まることなく、回覧することができた。

ウ 音楽に合わせてプリントを回覧する。

音楽がかかれば動き、音楽が消えれば動きを止める。イス取りゲームと同じルールであるため、すぐ生徒は取り組み方を理解した。音楽をかけるタイミングやかける長さを調節することで、単純に回覧を繰り返すことにならず、笑いながら回覧する生徒も見られた。

エ プリントを読んだら名前をサインする。

名前を書くことを嫌がる生徒は見られなかった。どのプリントにも意見を読んだ生徒の名前が書かれていた。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

生活単元学習だけではなく、別の学習でも回覧による意見交流を行った。生徒には、「このような方法が、話さないで意見を交流することが良いのかどうか迷っていること。しかし、様々な意見を交流することで、多様な考えに触れることは、意味のあることだ。」と聞いてみた。すると、話を聞いてうなずいている生徒が見られた。取り組みの効果については、もっと生徒から聞き取る必要があるだろう。

回覧による意見交流は、同じ方法が続くと、生徒が飽きてしまうのではないかと考えている。例えば、別の場面で回覧をしたときは、スタンプを用いてみた。一人一人に絵が異なるスタンプを持たせて、「相手の意見を読んで、この意見が良いと思ったものに、スタンプを押してみよう。」という指示を出した。回覧が終わったプリントを見ると、特定の意見にスタンプがたくさん押されていた。学習している仲間同士がどのような意見にうなずいたのか、ひとめで見て分かる取り組みとなった。

今後、回覧で意見交流をするときも、例えば「意見を書いたプリントを教室の壁に掲示し、美術館を巡るように見て回り、交流する」「意見を書いたプリントを裏返しにして床に置き、ひっくり返したプリントの意見を見て、交流する」など様々なパターンを取り入れてみたい。また、「相手の意見に書き込む」など書き込みながら意見交流をすることもできるだろう。感染症対策とともに、生徒が「こんな意見があるのか！」と楽しみながら交流し、今後の生活に生かしていく。そのような実践を積み重ねたい。

参考文献 石川晋(2012)「対話がクラスにあふれる！国語授業・言語活動アイデア 42」pp. 44-45

令和 2 年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	各教科等の横断的な実践と深い学びの視点での実践	所 属	窯業科 3 年（担任）
		職・氏名	教諭・山本 拓郎

1 実践の概要

新学習指導要領において「知識、技能」「思考力、判断力、表現力等」のバランスを重視した教育を行い、「学びに向かう力、人間性等の涵養」を図り、生徒に生きる力を育むことが求められている。そのため、学校においては、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善が求められている。しかし、3つの柱を育むための授業実践については研究でも取り組んではいるが、改善すべき点は多々あると感じている。特に、「深い学び」の視点での授業実践は、取り組んではいるが生徒たちの実生活や今後の社会生活にまで結び付いておらず、断片的な知識や技能に留まっていることが多いと考える。そのため、今年度は「各教科等の横断的な実践と深い学びの視点での実践」として研修、実践する。

今回の研修では、「数学と作業学習」、「総合的な学習の時間と数学」「国語と生活単元学習」の3つについて「深い学び」の視点での実践を行った。この実践をとおり、様々な場所で得た知識や技能を発揮することで学習の定着につながるのではないかと考える。

2 実践の内容

(1) 各実践内容について

ア 「数学と作業学習」

数学における「面積や体積」と作業学習における「石膏板づくり」では、数学では面積や体積の実際の求め方を展開し、それを活用して作業学習では、今年度作成する皿の型を体積の計算し、水と石膏の分量を確認して作成した。成果としては、生徒それぞれが作成する皿の型ということもあり、体積の計算を何度も確認したり、分量も確認したりしながら取り組み作成することができた。課題としては、水と石膏を混ぜる際に、時間をかけ過ぎてしまうと、石膏がどんどん固まってしまうため、確실히行おうとした結果、失敗してしまう生徒もいた。しかし作成した石膏板を実際の作業学習で使用することで、生徒の意欲付けにはなったのではないかと考える。

イ 「総合的な学習の時間と数学」

総合的な学習の時間における「PCの活用」と数学における「公共交通機関の利用や時刻表調べ」では、2年次に行ったPCでの知識を基にして、数学で見学旅行に向けた公共交通機関の時刻表や料金等を調べる学習を行った。成果としては、生徒それぞれが道内の公共交通機関だけではなく、見学旅行先の宮城県やそれ以外の主要都市の公共交通機関の時刻表や料金表を探ることができた。しかし、本来であれば学んだ知識を見学旅行先で時刻表や料金表を見ながら自主研修を行う予定であったが、今年に関しては公共交通機関を利用しない自主研修になってしまったため、より深い学びの習得にまでは至らなかった。

ウ 「国語と生活単元学習」

国語科における「電話の応対と対応」と生活単元学習における「見学旅行の自主研修における昼食場所の電話予約」では、国語で電話の応対と対応の違いについて学び、実際に電話連絡するときには、どのような事柄を想定しておけば良いのかを学習した。成果としては、見学旅

行の単元で実際に昼食場所に電話連絡をして、予約することができたグループがあった。課題としては、電話予約を全生徒ができたのではなく、グループの中から1人しかできなかったため、知識を生かすことができた生徒とできなかった生徒が出てしまったことである。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今年度は主に教科等横断的な視点と深い学びの習得に向けた授業実践を行ってきたが、授業実践を行っていく中で、「主体的・対話的」な視点もおおのずと必要となっていたため、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業展開ができていたのではないかと考える。しかし、実際にこの観点で授業するには、「何をどうすればいいのか分からない」という声も少なからず聞こえているが、実際に取り組んでみて、「この教科では〇〇なことを身に付けさせたい。」「この単元では〇〇な知識を身に付けさせたい。」というように、教師側のねらいがある程度明確に定まっていれば、特段授業展開に困るようなことはなかった。中教審答申にもあったように「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の3点をしっかり踏まえた授業展開を実践することが今後も求められてくるため、研修や研究のときだけではなく、学校全体としてこれがスタンダードになると生徒へのよりよい学習環境の提供ができるのではないかと考える。また、町などとのつながりといった特色ある学校のため、そういった部分も活用できると更なる学習効果が望めるのではないかと感じる。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	作業学習における観点別評価について	所 属	家庭総合科1年（副担任）
		職・氏名	教諭・村瀬 はるな

1 実践の概要

現在、シラバスでは、単元目標を「知的・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう人間性」の項目に分けて設定している。観点別で目標設定をすることで、生徒の課題解決力や身に付けさせたい力を明確にすることができる。しかし、作業学習は他教科と比べると単元数が少ないため、単元目標が長期の設定となる。その際、評価の難しさや目標設定の改善等を考える必要があるのではないかと考え、今回のテーマで研究を行った。

2 実践の内容

作業学習の単元「学校祭に向けて製品を作る」の単元目標を「知的・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう人間性」の3つに分けた。目標は「製品づくりの工程を理解することができる。」「作業時間を意識して行動することができる」「仲間と協力して作業することができる。」であった。また、家庭総合科1年の生徒を対象に、観点別の目標と評価を基に後期目標の評価を行った。

個人の後期目標を観点別の目標と照らし合わせると、3観点のうち、どこかには当てはまっているため、観点別の評価を個人の後期目標の評価につなげることは可能であった。しかし、単元が7か月間と長期に渡るため、シラバスで設定されている観点別の目標をすでに達成してしまう生徒が多く、観点別の目標と生徒個人の目標にずれが生じている場合が多かった。

今回、評価をしてみて、長期に渡る単元目標を改善する必要があると感じた。特に、課題解決が早い生徒は、目標の段階を上げていくため、単元目標と個人の目標のずれが大きくなる。そのため、作業学習の特性上、単元が長期に渡ってしまうことを考慮し、単元の中でいくつか区切りをつけ、目標を設定することで、評価につながりやすくなるのではないだろうか。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

観点別評価を個別の支援計画や指導計画につなげる方法を考え、作業に焦点を絞って行った。作業学習は単元が長期に渡ることで評価のしにくさが出てきたことは、今回の成果であった。しかし、この長期に渡ることを生かして、評価につなげていく方法を見つけていく必要があると感じた。また、今回の研究を通して、シラバスの単元目標と個別の支援計画・指導計画を照らし合わせていき、生徒の目標立てをしていく必要があることを改めて実感した。実態把握ができていない1年生の前期の段階で、すべてを照らし合わせて的確な目標立てをすることは、かなり難しいことだと思うが、生徒に必要な力を身に付けさせていくためには必要であると考えた。そして、目標を明確に立てることによって、深い学びにつながるような授業展開や指導ができると思う。今後、目標を立てるとき、評価するときは、各教科、形態の単元目標を確認しながら行っていきたい。